第６章

新中国に支援した日本共産党員
―大連日語専科学校の日本人教師団

はじめに

大連日語専科学校の設置に伴い，中国共産党と日本共産党の交流活動の一環として，24名（家族を含む32名）の日本共産党が日本語教師として大連日語専科学校に派遣された．これら日本人教師はどのような夢を持って中国へ渡ったのか．彼らは中国でどのような待遇を受けどのように生活していたのか．さらにどのような授業を担当し，どのように教えていたのか．そこには日中関係のもう一つの側面が見えてくるはずである．

本章では，日本人教師の来華ルートや待遇，大連日語専科学校における教育活動などについて明らかにする．

第1節　日本人教師の招請

(1)来華経緯

日本語人材の不足問題を解消するため，中国共産党は日本共産党から日本語教師を派遣する協定を結んだ[1)]．この協定によって，1964年10月から1965年5月まで，延べ24名の日本共産党員が中国に派遣され，日本語教師として大連日専で奉職した（表1）．また，彼らに随行して渡中した夫人8名が後に正式の日本語教師として追加採用された（表2）．つまり，日本人教師の数は計32名にのぼった．

今回の調査で大連日専で厳格に管理されており，これまで公開されていない日本人教師に関する「檔案」など公文書65点（表3）を入手した．これらは大連日専と高等教育部など中央各部署との間に交わされた往復文書で，「絶密」「機密」，「秘密」の印字あるいは印が押されたものがほとんどであった．これらの公文書の最後には，対外文化聯絡委員会（略称，対外文委），国務院外事弁公室（略称，国務院外弁），国務院外国専家管理局（略称，外専局），北京広播事業管理局，外文出版事業局，遼寧省教育庁（略称，省教育庁），遼寧省外事弁公室（略称，省外弁），遼寧省公安庁（略称，省公安庁），中共旅大市委員会文教部（略称，市委文教部），旅大市外事弁公室（略称，市外弁），校内の共産党委員会書記（略称，党委書記），共産党委員会弁公室（略称，党委弁公室），校長，教務長など関係部署にも送ったことが記されていた．その他，「存檔二份」，つまり保管用2部が作成された．ここで使用したすべての公文書は，この保管用公文書である．

これらの公文書から，日本人教師は基本的に香港経由で北京に赴き，それから大連に向かったことが分かった．また，日本人教師の受け入れ窓口は「対外文化聯絡委員会」であったことが分かった．対外文化聯絡委員会は日本共産党からの推薦を受けてから，日中友好協会宛てに日本人教師の要請状を送る．一方，日本人教師たちは様々な渡航目的で旅券を申請し，中国公安部第一局より入国の査証を取得する．来華した日本人教師は高等教育部に振り分けられて，高等教育部より大連日専に派遣されるという図式であった．国交がない時代であったため，彼らが大連日専に赴任する経緯はすべて極秘とされた．日本人教師たちには日中文化交流協会を通じて，日本語教育援助のため中国の学校に赴任しないかという打診がされた．これに応えることを決めていても，国交回復前のことであり支障があるかもしれないと旅券がとれるまでは親にも内密にするほどであった[2)]．

65点の公文書には，日本人教師の赴任に関する通知がもっとも多く14通であった．通知には，教師の紹介文が付いていた．そこには，対外文協の要請で，「研究」活動に従事することが記された．研究対象は「中国児童文学」，「中国現代文学」，「哲学」，「中国文

学史」,「中国歴史」,「児童教育」などとされた．また，彼らの来華資格が記された．教員として要請されたことを明確に示したのは 2 名で，ほかは「留学」か「研究」もしくは何も記されていなかった．ちなみに，教員として要請された 2 名は，リーダーの Y 氏（東京大学法学部出身）と T 氏（京都大学大学院文学研究科出身）であった．

また，日本人教師の呼称は，ほとんどは「日籍教師」もしくは「外籍教師」と記された．リーダーの Y 氏だけは「専家」という呼称が使われた．Y 氏は国の定める「専家」とされたが，その他は「専家」待遇を受ける者，「専家」に準ずる者として位置づけられていた．

これら日本人教師の到着にあわせて高等教育部は「関於下達聘請外籍教師計劃和做好準備工作的通知」（外国籍教師招聘計画とそれに伴う準備についての通知）を出し，外国人教師招聘の目的や対応についての方針を打ち出した．そこには，国が莫大な資金を投じ大量に外国人教師を招聘する計画が示され，彼らに期待する仕事の内容が定められた．具体的には①日本語教師の力量向上のための教育などを行い重点的かつ迅速にリーダーとなる日本語教師を養成する．最も優秀な外国人教師を選び教師クラスの責任者とする，このクラスには周辺学校の教師も積極的に受け入れる，②教材編集に対する協力，③年間カリキュラム作成に対する協力，であった．授業時間は週 16 時間前後とされた．また，彼らには政治的に信頼でき，教学に詳しい通訳を付けるよう指示されていた．

日本人教師の生活を保証することも記された. 問題があれば積極的に解決するべきこと，さらにこの事業に関わるすべての経費は「其他費用」として学校予算に計上すること，彼らの外貨両替は国家財務部の予算に入れることなど，経費的には国が責任を持つことが明示された．

(2)最初に赴任した日本人教師

最初に着任したのは，Y 氏，Y 氏夫人， S 氏，A 氏の一行であった．同行する家族を合わせて合計 12 名であった．受け入れ経過について，大連日専は 10 月 17 日に「省教育庁，市委外事小組，市人委外事弁公室」に「絶密」の「(64) 日専校字第 29 号」の報告書「関於貫徹中央外籍教師工作会議精神和接待安排第一批来校日籍教師工作情況的報告」(中央外国籍教師工作会議の精神に基づく第一次日本人教師受け入れの状況に関する報告）に詳しく示し，「国務院外事弁公室，国務院外国専家局，高教部，省委文教部，省人委外事弁公室，市委文教部」にも送った．報告書は，到着後 1 週間の出来事を示したもので，①外国籍教師の赴任に関する中央会議の内容，②日本人教師の赴任と学校側の対応，③中国社会主義建設の成果についての見学や訪問，④緊急の課題の 4 部分に分けて書かれた．以下②の内容から日本人教師たちがどのように迎えられたのかみてみたい．

○　出迎えについて．第 1 回日本国籍教師 3 名は，10 月 9 日夜大連に着いた．事前に関係部署（外事弁公室，交際処，公安部門など）と連絡を取った上で，当日は，我が校から処長級幹部 2 名および随行者 5 名で駅に出迎えた．外国籍教師が暫くの間，雲山賓館に宿泊するので，当賓館の支配人および従業員も出迎え，ホテルまで案内し，各自の部屋に落ち着くまで随行した．この出迎えについて日本人教師たちは大変感謝してくれた．S 氏は雑談の中で「私たちは中国へ来てから至るところで熱烈な歓迎を

受けた．中国同志の民主，平等の姿勢を学びたい」と語った．

○　住居について．市委，市外弁の温かい指導の下，到着以前に住居はすでに決定しているが，内装作業中であるため，一時的に 3 世帯を雲山賓館に宿泊させた．人数に従って部屋割りをした．賓館の条件は比較的良く，清潔で広かった．設備は大体日本の風俗習慣に合っている．スイート・ルームを用意し，生活用品およびその他の設備も完備している．また，ソファー，テーブル，事務用品を備えた仕事用の部屋も準備した．その他，彼らの子弟が中国語を学べるようにテーブル，いすを置いた小部屋も用意し，学校から中国語教師 1 名が派遣されることになっている．

○　食事，及び医療について．食事は生活上の重要な課題である．大連に着いた翌日，彼らと食事について相談を行った．彼らの意見に基づいて，1 人 1 日 1 元 2 角の食費を定めた．この金額は賓館側の精一杯の配慮により，実費のみで利益は含まれていない．彼らは大変喜んで，「中国の物価は大変安く日本よりかなり生活しやすい」と何度も口にした．

医療については，衛生部門の多大な協力によってすぐに「特診証」が公布された．彼らは何度も我が党の温かい計らいに感謝し，社会主義の国にしかこのようなことはできない，これから精一杯働いてこの恩に報いたいと語った．

その他，「物品購買証」取得の手続きを行った．また，1 人（家族を含む）40 尺の布の配当券を支給し，300 元の給料の前払いも行ったので，彼らは大変喜んだ．市内案内の際に百貨店に行き，冬物の中国服一式と生活用品を購入した．彼らは中国へ来る前，日共中央から中国人と同じ物を食し，同じ所に住むよう言われていたので，服装も中国人と同じようにしたのである．人民公社を見学するとき，彼らが好むサツマイモとリンゴを少しづつ買ってもたせた．総じていえば，各部門の多大な協力ならびに学校の関係同志の積極的な努力によって，彼らは快適な楽しい生活を送ることができている．

③の内容は，市内，工場，農村の人民公社，雑伎，演奏会などを見学した様子やそれに対する日本人教師の感想である．こうした見学を行う目的は，社会主義中国や中国共産党の政策の有効性に対する理解を深めさせることにあった．「今後このような国際交流事業を徹底的に行うことによって，彼らへの教育がさらに深まり，彼らの仕事に対する情熱は一層高めることができる」と述べられている．

④緊急の課題として，彼らの住居を整えるべきことが挙げられている．一時的に賓館に宿を定めているが，日本人教師達からは度々，一日も早く定住できる家に移りたいと申し入れがあった．それというのも，一人の婦人が妊娠中であり近々出産の予定であること，さらに主人に随行してきた婦人達は自分で炊事をして日常生活を送ることを強く望んだからである．また，長く賓館に留まることは，子ども達の教育に遅れをきたすことになるという不安も抱いていたようだ．

一週間後の 10 月 17 日，大連日専は再び「大連日専外籍教師思想動態簡報（一）」（大連日専外国人教師の思想状況についての報告(一)）という報告書を出した．冒頭で Y 氏，S 氏，A 氏，S 氏の夫人も日本共産党員であることを紹介し，着任後の思想動態を①生活情況，②中国共産党，指導者および三つの赤旗と呼ばれる政策に対する見方，③最近の二大

事件への反応の 3 部分に分けて記した．

①生活状況について，日本人教師達は喜んで中国の社会主義建設に協力すると常に口にしていると述べられている．日々楽しく生活しており，大連での生活について非常に満足しているようだとも記されている．S 氏はホテルの部屋割りの際自ら小さい部屋を選び，「これでも日本での環境よりよい」と述べ，さらに「贅沢は求めていない，なぜなら贅沢をすれば中国人民の心と離れてしまうだろう」と言ったという．3 人は共に教材を研究し，中国語を学んでいた．また彼らは中山服を購入し授業の際はこれを着ると言っているし，子どもに中国服をあつらえた者もいた．彼らの生活態度を総じて言えば，喜んで中国に同化しようとしており，こうしたことから中国側の待遇に満足していることが窺えると述べている．

②の部分では，日本人教師たちが中国共産党の方針を理解し，これらを評価していると報告されている．

③では，中国の第一回原子爆弾実験の成功とフルシチョフの失脚という二大事件に対する日本人教師達の反応が簡潔に述べられている．いずれの事件に対しても，日本人教師達は自らの立場を明確にすることを敢えてせず，中国批判になることは口にしないよう避けていたように見受けられる．

同年 11 月 25 日，大連日専は「大連日専外籍教師情況簡報（二)」(大連日専外国人教師の思想状況についての報告(二)) を出した．この報告書は 11 月 17 日に新たに到着した K 氏を含む 4 名についての評価を記したものである．4 名は総じて政治に対する意識が高く，毛主席を始め中国社会主義に対し敬意をはらっている．また，みな中国語を積極的に学んでいる．深夜まで授業の準備をし，自らガリ版で会話教材を作るなど仕事において非常に真面目で，生活面においては，1 日 1 元 2 角の最小限の食費で特別なものを求めたりせず，自らを厳しく律している．さらに中国服を身につけて服装からも中国に馴染もうとする姿勢がみられるとしている．

その他報告書は，4 名一人ずつについて，その人柄，性格，仕事ぶり，政治思想，家庭状況などについて細かく記しているが，個人的事情に触れることになるのでここでは詳しく紹介することは控える．

(3) 日本人教師の全体像

表 1 を一瞥すると，日本人教師たちは，全体的に学歴が高い．大学院修了が 2 名で，京都大学大学院の 1 名と東京中央無線電信大学研究科の 1 名であった．大学卒が 19 名で，うち，東大卒は 4 名，早稲田大は 3 名，信州大は 3 名，福島大は 2 名，立教大は 2 名，東京農大と茨城大と岩手大学と東京学芸大と大分大は各 1 名であった．残りの 3 名は，高知師範学校研究科修了が 1 名，東京第一師範学校卒が 1 名，東京立正学園高等女学校卒が 1 名であった．また，専攻別から見れば，国語が 9 名ないし 10 名（Y 氏（No16）は国語を教えていたが，国語を専攻していたかどうかは不明）でもっとも多かった．

24 名の日本人教師のうち 20 名が教職を経験していた．うち，中学校教員は 9 名で，小学校教員は 7 名，高校教員は 4 名であった．教職歴を見ると，1 年未満は 1 名，1 年から 4 年が 4 名，5 年から 9 年が 4 名，10 年から 14 年が 7 名，15 年から 19 年が 2 名，20 年から 24 年は 2 名であった．もっとも短いのは半年で，もっとも長いのは 24 年であった．経

験の浅い教員よりベテラン教員の方が圧倒的に多かったことが分かる．彼らの「ほとんどは日本での教職をなげうって，かなり長期の予定で大連に来た」ようであった[3]．残りの4名は詩人，劇団員，大手企業外国部の会社員，教科書編集者の4名で，いずれも高度な国語力が要求される職業であった．教師や国語のプロを選んで中国に派遣したことが分かる．

彼らの年齢層を見てみると，30代がもっとも多く16名で，20代は7名であった．40代は1名しかいなかった．精力的に活躍できる若手を中心に選んだことが窺える．

性別から見れば，男性が圧倒的に多く17名で，うち，独身者は3名であったが，1名は後に日本国内から婚約者を呼び寄せて大連で結婚した．女性は7名で，うち，独身者は2名であった．家族で来華した者が多く，うち，中国滞在中に子どもが生まれたのが8世帯で，その中の1世帯は二人の子どもをもうけた．中国で腰をすえて生活しようとする姿勢がうかがえる．それはまさに「中国に骨を埋めるつもりで…」という覚悟だったのである[4]．

第２節　日本人教師の教育活動

(1)大連日専の始動

前述したが，日本人教師の担当授業数は「週16時間前後」と大まかに決められた．しかし，表1から分かるように，日本人教師の定員数27名を満たしていないため，実際には大半の日本人教師は週18時間の授業数を担当していた．また，週20時間を担当する若手教師もいれば，出産などの理由で特例として週8時間しか持たなかった者もいた．教材編集を担当する教員は授業を担当しないかもしくは授業数が極めて少なかった．総じて言えば，労働時間は計画より一割程度増えたと言える．

日本人教師第一陣が到着したとき大連日専はいまだ校舎がない状態であった．それでもY氏は教師としての仕事を始めていたことが彼の回顧録から分かる[5]．開校当初の雰囲気を感じることができるのでここに紹介する．

> 九月下旬開校という促成計画の実行で，当初学校は校舎をもたず，旅順に至近の海運学校（車で五十分ほど）とそこへの中間の鉄道学院（三十数分）の施設を借りて仮校舎にしていた．ぼくは中国人教師再教育の仕事もあって海運学校へ．…
>
> 中日教師全体の会議で「聞く，話す」に重点をおく教育が指示された．学校内では教師も学生も日本語以外話さないという雰囲気を醸成するのだ，という．中国人教師の中には戦前の日本への留学体験者や日本人中等学校・女学校以上の学歴者が多い．ともに出身は往時の富裕層だろうから，つい最近までは過去を表に出すことを控えてきた人たちと見えた．
>
> 中国人教師再教育のテキストの中には「母親（ムーチン）」という一文があった．読むと小林多喜二「党生活者」のさわりの部分．朗読を懇望されて読みあげた．ほとんどぼくより年配の男女教師だったが，涙を見せる女性教師もいて，多喜二文学の伝達力を再認識したことだった．
>
> 学生は東北三省，とりわけ遼寧省の農民層出身者が多く，全国いっせいの画一的な入学試験で，この学校に振り分けられてきたケースもあり，まさか日本語学校に「分配」されるとは考えもしなかった，とぼやく学生もいた．入学してはじめて海を見たとか，はじめて汽車に乗って大連に来た，と告白する純朴そのままの学生も少なくな

かった．女子学生の大半は下げ髪で，日本の中学生のような純真さを感じさせられた．やがて，彼ら彼女らは習い立ての日本語で「日本語の『どうも」にはいくつ意味があるのですか」とか「『人』という文字はあるときに『にん』と読み，あるとき『じん』と読みます．どう区別しますか」とか難題を発するようになった．

「聞く，話す」に重点をおき，校内では日本語以外使用しないという意気込みからは，実用的な語学力を養成しようとしていたことが窺える．そうした雰囲気とは対照的に，戦前日本との関わりを強く持っていた中国人教師たちの立場は微妙なものであったようで，日本人教師達にもそれが伝わっていた．しかし，学生達は素朴で熱心であった．こうした印象は他の日本人教師も強く感じていた．

H 氏は「日本語習得学生を大量に養成する国家目標，それは新中国の発展を支えるものであり，みんなその希望をもち情熱を注いで教学を進めていた．優秀な学生とともに，日本人教師の参加は日本語習得への寄与とともに，政治的に大きく勉学を励ましたし，中国人教師は情熱的に教育に携わり教学上めざましい成果を生んでいた」と当時の全体的な様子を述べた [6]．中国人教師たちはさまざまな背景を持ったものたちが集まっていたが，それを敢えて聞くことは憚られる雰囲気があったのだろう．H 氏はある中国人教師の「流暢な日本語に，『どこで覚えたのですか』と聞くと『女学校で』といい，それ以上のことを話したがらなかったし，精いっぱいの答えに思えて続けて聞くことをやめた」と回想した [7]．初めての授業の様子は以下のように語られている．

初めての授業を私はいまも印象深く覚えている．教室に入ると目を輝かせ向学の念にあふれた激しい熱情に圧倒され，一言も聞き漏らすまいとする緊張感で私は迎えられた．壺井栄流にいえば三十六の瞳に見つめられた．私も気を張って彼らの熱情と向き合って，それに負けるわけにいかないと心が燃えた．互いに緊張し心が高ぶったのを覚えているが，彼らは最初の授業でこれからの学習の方向を掴みたい必死の思いがあった．大学で勉強できる喜びに満ち，素朴で明るかった．初めて会う外国人教師に緊張し日本語学習への興味を増したようだった．

彼らは東北三省，つまり旧「満州」の出身だから，支配者，侵略者であった日本人への感情は特別のものがあった．新中国が誕生したときは五，六歳のまだ学校にも入っていない子どもであった．学校では日帝支配の実態を学習し，家族親戚から体験を含めその話を聞いていたから，日本人の私をどういう目線で見るか気にしていた．

彼らは学ぶことによって新社会建設を推進し，人民の豊かな生活に貢献できるという使命感に裏付けされた情熱に満ちていて，前向きで両国人民の連帯友好の情に溢れていた．日本の侵略と国民党との争いに勝って人民権力が作った大学で学ぶ機会が得られことを革命の成果と受け止め，学習意欲は強く底抜けに明るかった．抑圧からの解放は若者に無限のエネルギーをもたらした．

学生達の学びに対する熱気を感じる．こうした学生達の期待に日本人教師たちも全力で応えようとした．

(2) 日本語教育への情熱

日本人教師は極めて真面目で仕事に非常に熱心に取り込んだ．その言葉は公文書「大連日専外籍教師思想動態簡報（一）」（大連日専外国人教師の思想状況についての報告(一)），「大連日専外籍教師思想動態簡報（二）」（大連日専外国人教師の思想状況についての報告(二)），「大連日語専科学校半年来専家工作総結報告」（大連日語専科学校半年間の専家の業務状況に関する報告），「大連日語専科学校関於日籍教師半年綜合分析材料的報告」（大連日語専科学校半年間の日本人教師の総合的分析と報告），「日籍専家 Y 氏両年来的簡要情況」（日本人専家 Y 氏の二年間の状況要約），「大連日語専科学校関於日籍教師近況的簡報」（大連日語専科学校日本人教師の近況に関する報告）などに随時見られる．たとえば，Y 氏（表 1 No1）は，「会話教材を急いで編集するため，常に深夜，まで仕事をしていた」[8]．「授業総括を書くため，連続二晩が徹夜したが，昼は普段と同じように仕事をしていた」[9]．また，広播事業局の要請を受けて，1966 年 1 月から北京ラジオ放送の日本語放送に出演し，中国での仕事や生活および見聞などを 2 カ月 1 回で紹介し，対日放送に協力した[10]．Y 夫人（表 4No1）は，正式に任命される以前から積極的にテープの吹き込み作業を行っていた[11]．

S 氏（表 1 No2）は，「授業後や休日にもあまり休まず，時には一人で弁公室で授業を準備していた」[12]．A 氏（表 1 No3）は S 氏（表 1 No2）と「同じく，自らガリ版で教材を作っていた」[13]．教材を編集していた S 氏（表 1 No2）と S 氏（表 1 No15）は，「仕事が多くてしかも急がなければならない時にも弱音を吐いたことがなく，よく徹夜で仕事をしていた．彼らに与えた仕事は一度も遅れたことがない」[14]．S 氏（表 1 No15）は，「教材編集のため，自ら歯の治療を遅らせた．彼らの積極的な努力と中国人教師の協力によって，一年生の教材と二年生一部の教材が編集できた」[15]．

Y 氏夫妻はよく深夜まで授業を準備していた．Y 夫人（表 1 No9）は「赴任したまもなくの冬休みを利用して当時の試用教材である北京大学が編集した一年生の二冊教科書を徹底的に分析した」．「学生に深い愛情を注ぎ，学生から厚い信頼を受けていた」．夫の Y 氏は「ぼくの妻は学校と結婚した」と仕事に夢中する姿を語った[16]．

K 氏（表 1 No5）は「前期試験前に行われた総復習の際に自ら休日，しかも大雪に学校に来て学生を指導した．後期は風邪を引いても休まず授業を続けた」[17]．

T 氏（表 1 No12）は「一週間程度で食欲不振，…身体が怠い．それでも仕事を続けていた」[18]．

若手教師 T 氏（表 1 No10）は「常に学生と一緒にいる．本人から学生宿舎に住み，学生と寝食ともにしたいとの申し出が何度も出たが，生活環境を整えるのが難しいため，結局は実現できなかった．現在は常に学生宿舎で学生と一緒に生活し，教職員食堂で食事をしている．生活は質素である」．若手教師の S 氏（表 1 No7）と M 氏（表 1 No6）は，試験の前に「休日を犠牲にし，大雪の中で学校に来て学生の指導を行った」[19]．

以上は，日常的なできことの一部分にしか過ぎないが，こうした記録から，彼らの努力は学校に大いに認められていたと言える．

（3）担当科目

公文書から，日本人教師が担当した科目が分かる．24 名には，S 氏（表 1 の No15）を

除き，全員が学生に対する「会話」授業を担当していた．「会話」授業のチームリーダーは，日本人教師全体のリーダーでもあるY氏であった．教材編集を担当していたのは，A氏（(表1のNo3)，T氏（表1のNo11)，S氏の3人で，うち，A氏は「会話」教材を編集していた．また，中国人教師の研修クラスの授業を担当していたのは，S氏（表1のNo2)，A氏（表1のNo3)，K氏（表1のNo5)，S氏（表1のNo7）で，同クラスの補導授業を担当していたのは，T氏（表1のNo12)，G氏（表1のNo14）であった．Y夫人（表1のNo4）とY夫人（表1のNo9）は東京で生まれ育ったので，ヒアリングのためのテープを吹き込む作業も担当した．また，後に教師として追認された家族6名（表2）は，主に補導授業を担当していた．

随行してきた家族が後に教師として迎えられた経緯は，Y氏の回顧録に次のように述べられている[20]．

> 第一期生だけで五百二十五人（男子三百十九人，女子二百六人）を入学させた学校側からは，会話などの教員不足の補充として，教職経験のない日籍教師夫人たちにも教壇に立ってほしいという要望を，孫副校長を通じて伝えられてきた．教師団と当の夫人たちが寄り合って相談した結果，その要望に応えることになった．妻も産後の回復を待って会話教師の仕事をすることになる．先生なんて……と遠慮していた人も，毎日遠い仮校舎まで通い始め，老師仲間になった．中国人教師や素朴で純真いちずの男女学生と接触するようになって評判もよく学校側には感謝され，本人たちも自信を得たようだった．何より現代の日本語を話せる人との対話の機会がふえる，それだけで学生に学校にも歓迎された．

日本人教師たちの夫人たちも積極的に協力した．ヒアリング教材作りの苦労をH夫人は「テキストを次々と全部録音してねー．録音室は窓に毛布を張った部屋で，もちろん空調などはないので，夏などは汗びっしょりになってしまって．女性の声が聞き取りやすいといわれてねー」と回想した[21]．

(4)教材編集と教育方法

日本人教師がもっとも力を入れたのは，教材の開発や教育方法の模索であった．初年度前学期では北京大学日本語学科が編集した教科書『日語』の第1冊と第2冊を用いたが，学生が文法に縛られ，会話教育に適用しないことが分かった．こうして，初年度後学期から日本人教師は中国人教師と共に教材編集に力を入れた．他大学の日本語教材はもちろん，日本の中小学校の国語教科書，国内外の新聞，書籍を約330点を収集した．旅大市図書館の支持を得て，20万冊の中国語や日本語の図書を選び，贈呈を受けた．さらに日本共産党直系の『しんぶん赤旗』,『読書の友』,『前衛』,『文化評論』，中国共産党の海外向け広報誌『北京週報』など数十種類の日本語雑誌や新聞を講読した．努力を経て一年生用教材4冊45回分の授業内容が編集された．同時に,『毎課教学建議』（毎回授業の教学建議）も作成し，教師の参考に供した．電化教学センターを作り，各教室に録音機および録音用の資料を配置した．さらに学生の課外読み物を編集した．その努力の姿は公文書に次のように記録された．　Y氏（表1 No1）S氏（表1のNo2)，A氏（表1のNo3）の「三人は

常に一緒に教材を研究している」[22]．特に S 氏（表 1 の No2）は学校の教材編集チームに参加し，半年中に 8 レッスンの会話教材を編集した．編集中に教材の思想性や系統性および学生の実情について繰り返し検討し，資料の収集にも力を尽くした．また，学生の聴解練習のため，延べ四万の言葉をテープに吹き込んだ[23]．こうして，大連日専は徐々に北京大学日本語学科の教科書を使うだけの状況から脱皮し，自分の目標に相応しい独自の教材を開発した．

教育方法において，日本人教師は「聞く，話す」という直感的な教育を主張した．生きた文法を教え，実践，つまり会話練習を通じて文法を身に付ける．また，文法のみ教えるのではなく，文章に使われる文法を教えることを主張した[24]．そのため，Y 氏（表 1 の No1）S 氏（表 1 の No2），M 氏（表 1 の No6）らは実物や図画を用いて，あるいは表情や動作で学生に言葉の意味を丁寧に説明していた．A 氏（表 1 の No3）は，学生の日本語会話を録音してから一人ずつ発音を矯正していた．

日本人教師たちの積極的な努力によって，学生の日本語能力は急速に高まった．「座談，問答，対話の形式」をとっていた前期試験の結果，日本人教師が担当していた 14 クラスでは，学生が発音，聴解，簡単な会話において全体的に良く，成績優秀な学生が 85 %を占めていた．この成果を見て日本人教師は感激し，驚いた．「日本の学生は 5 年間英語を勉強してもしゃべれないのに，中国の学生はわずか 3 カ月の日本語学習で，すでにある程度の会話ができた．中国共産党の教育方針と毛主席の教育思想は素晴らしい」．「このまま努力して行けば，後二年で一般的な通訳なら担当できる」と嬉しく語った[25]．

こうして日本人教師，中国人教師，そしてなにより学生達の熱意によって効率の高い教育が進められていた大連日専が独自の校舎を有するようになったのは開校して 9 ヵ月が経ったころであった[26]．

> …開校してすでに九ヵ月．ようやく独自のキャンパスをもてることになったのは，国際労働節（メーデー）過ぎ．中山広場から南へ数百メートルのゆるい勾配の通りを登りつめた高台にあるコンクリート建ての新校舎である．中国共産党旅大市委員会党学校校舎を，そっくり日専が譲り受けたのだという．五月六日，全校は，全寮制度の寄宿舎をふくめ，新校舎に移転した．学生たちはみな喜色満面，幹部や教師，ぼくら日籍教師家族ももちろん大喜びだった．

かくして大連日専は校舎を構え，地に足をつけ教育を展開していった．

第３節　日本人教師の待遇と日常

(1)給料

1964 年 12 月 10 日，大連日専は高等教育部に「関於評定日籍教師工資的請示報告」（日本人教師の給料の評定に関する伺い）を出した．これは「関於文教部門外国専家和按専家待遇的外籍工作人員基本生活待遇的規定」（文教部門の外国専家及び専家待遇として外国籍職員の基本的待遇に関する規定）に基づいて算出された 4 名の日本人教師の給料についての案である．

授業や教材作りなど仕事ぶりを踏まえ，彼らのリーダーである Y 氏から各自の国内で

の給料の状況と意見を聞き，学校での協議を経てそれぞれの給料案を策定した．

日本国内での月の収入がY氏は3万円（200元），S氏は6万3千円（420元），A氏は5万7千円（390元），K氏は4万5千円（300元）であった．Y氏については自らの収入を控えめに申告したようだと報告書には書かれている．協議を経て出された案では，Y氏は中国給料等級で10～9級（460～500元），S氏は11～9級（420～500元），A氏は11～10級（420～460元），K氏は13～12級（340～380元）となっていた．これを見るといずれも日本国内での収入を上回る給料が案として出されたことが分かる．

これに対する決定「復幾位日籍教師的工資問題」（数名の日本人教師の給料問題への返答）が同年12月30日高等教育部から送られてきた．決定の内容は，Y氏は500元，S氏は500元，A氏は460元，K氏は420元であり，いずれも案の最高額あるいはそれを上回るものであった．当時，四大卒の給料は58元，大学講師は106元，準教授は164元，教授は220元，北京の医者の最高給料でも333.5元であった．こうした数字と比べても，日本人教師達の待遇は非常に良かったことがわかる．

その後も新たに日本人教師が赴任したら学校側はすぐ給料案の伺いを出し，給料を決めていた．公文書「関於評定Y氏等日籍教師工資的請示報告」（Y氏ら日本人教師の給料評定に関する伺いについて）と「関於幾位日籍教師工資問題的答復」（数名の日本人教師の給料問題への返答），「関於評定T氏等日籍教師工資的請示報告」（T氏ら日本人教師の給料評定に関する伺いについて）と「関於大連日語専科学校日籍教師工資問題的復函」（大連日語専科学校日本人教師の給料問題に関する返信），「関於評定Y氏等九名日籍教師工資的報告」（Y氏ら9名の日本人教師の給料に関する報告）と「関於Y氏等九名日籍教師工資問題的復函」（Y氏ら9名の日本人教師の給料問題に関する返信）は，すべてそれである．表1で示したように，いずれも日本での給料より高く，最低でも340元，最高は500元であった．また，「報請評定大連日語専科学校日籍教師工資待遇」（大連日語専科学校日本人教師の給料待遇の評定についての申請）に登場する単身来華のS氏のように，日本に扶養家族が5人いることを配慮して給料を高く設定される特例もあった．

このように，日本人教師を中国側は格別の待遇で迎えた．このことから，中国がいかに日本語人材の育成を急いでいたかが分かる．

(2) 日常生活や見学旅行

日本人教師の給料は高いが，「関於日籍教師近況的簡報」（日本人教師の近況に関する報告）に記されたように，生活面では中国人と変わらない生活を送るように心掛け，節約を旨とする日常を過ごした．節約した金銭は銀行に貯金したり，あるいは日本共産党や戦時中のベトナムに寄付したりした．ベトナム情勢は日本人教師達共通の関心事であった．寄付のいきさつはY氏が以下のように記している[27]．

> 何よりも気になったのはベトナム情勢．…
>
> 日籍教師間でも，何をなすべきかを相談し，さしあたってベトナムに支援カンパを送ることをきめた．「日籍教師の俸給は毛主席より高い」などの風説も耳にするほど，こちらで生活するかぎり，衣食住の基本は保障されているし，消費生活も極めて地味だから出費も少なくてすむ．毎月の給料の相当部分を銀行振り込みでベトナムに送ろ

うときめて，学校の担当者に相談した．当時郵便局窓口でもどこでも事務運びはスムーズさに欠けていた．が，その件は思ったより早く進み，在中国のベトナム関係機関に毎月カンパの送金ができることになる．送金手数料は免除された．学校の当事者には，なぜ日本人教師たちがそんなことをするのか，理解できない様子も見えた．

「関於日籍教師対越南形勢，我社会主義経済建設，教育方針和教学改革等問題的反映」（日本人教師のベトナム情勢，我が社会主義経済建設，教育方針と教育改革問題などに対する反応）には，日本人教師が毎月ベトナム人民に抗米救国の活動経費を寄付したこと．第一回は 930 人民元で，第二回は 450 元であったことが記されている．また，「関於 1966 年 1 月－ 6 月份外籍教師外彙情況的報告」（1966 年 1 月～ 6 月の外国籍教師の両替状況に関する報告）の附表「外籍教師作彙情況統計表」（外国籍教師両替状況統計表）に表されたように，多くの日本人教師は母国へ送金していた．

一方，日常生活においては，様々な問題やトラブルがあった．例えば，私書箱の問題はその 1 つである [28]．日本人教師は来華のために本当の渡航目的を隠して，様々な目的を作って旅券を取得していた．大連に着いた日本人教師はみな大連雲山賓館の住所で日本の親戚などに手紙を出したので，このことはいつか日本政府の知るところとなるだろうという心配を抱いていた．日本人教師のリーダーである Y 氏は，こうしたみなの不安を解消するために特別に私書箱を設けて欲しいという要望を出した．そこで郵便局と相談の結果，私書箱が作られた．しかし，その後，日本の友人の手紙から，すでに日本政府の知るところとなり何らかの措置がとられているようであることが分かってきた．例えば S 氏が来華前，自らの学生に贈った署名入りの手帳が当局によって没収されたこと，K 氏は来華後長期間，日本にいる婚約者からの手紙を受け取れずにいること，また福島県から来華している 5 人の教師とその家族 2 名の名前が反逆者として新聞に掲載されたこと，Y　氏が中国へ来る途中，東京の飛行場で友人と会い，「君は大連へ行くのか」と尋ねられたこと，などなどである．こうした情況から，日本人教師たちは日本政府が大連の日本語学校のことを知ることになれば，その後日本人教師の派遣が困難になるのではと心配していた．それは日本国内でも教員が不足していたからである. また彼らは日本政府が察知することで，帰国した場合仕事がなくなるのではないかという不安も抱いていた．よって，Y 氏は北京に私書箱を置いて，日本からの手紙は一旦北京を経由し大連に届けられるようにして欲しいと要求した．しかしこの要求に対する中国側の返答は，日本語教師の来華は公開された事業であり秘密事項ではない，よって私書箱を設ける必要はないというものであった．こうしたやりとりから，日本人教師たちは日本での身分や立場についての不安を抱えながら日々生活していたことが分かる．

また，住居の問題もあった [29]．大連日専が独自の校舎を有するようになったのとほぼ同時期，1965 年 5 月ごろには日本人教師達は雲山賓館から南山招待所の一戸建て住居に引っ越していた [30]．

六月になると，日籍教師・家族の宿舎も全員，学校から東へ歩いて十数分の南山招待所に移った．戦前満鉄の幹部社員の社宅だったとかで，一戸建ての住宅がなだらかな傾斜地に，通路をはさんで三列，一列ごとに六棟ほどが間をおいて並び，別棟に大

きな専用食堂がつく．当初は門脇に警備兵が立っていたが，間もなくいなくなった．ホテル（賓館）住まいから戸建ての住宅に移り，日籍教師・家族はみな安堵した風だった．裏庭にはテニスコートがあり，余暇には家族ぐるみでラケットを振った．

このように住環境が整えられたが，子どもが産まれたり，またはまもなく産まれる予定であったり，日本から家族を呼び寄せる予定であったりと人口が急激に増えたこと，また図書を中心とするものが増えたこと，さらに家具が増えたことなどによってその住居は手狭になっていた．よって大連日専は，さらに数棟の建物を使えるようにして欲しいという要求を出していた．また，雲山賓館には美容室があったが，南山招待所にはなかったため，日本人教師とその家族達はお互いに髪を切り合った．こうした情況を不自由に思った学校側は美容師の派遣を市に要求した．

その他に，日本人教師の子どもが通学途中，中国人の子どもから石を投げられたり唾を吐きかけられるといった嫌がらせを受けたという問題も起きていた[31]．さらに，子ども達の中には中国での生活に馴染めず，日本へ帰りたいという想いを募らせるものもいた[32]．

こうした日常生活の様々な問題に対処する一方で，生活に娯楽的要素を加えることで無聊を少しでも慰めようと，大連日専は市にいくつかの提案をした．それは工場や人民公社，国営農場などをもっと解放し見学できる場所を増やすことや釣りができる場所をいくつか設けることなどであった[33]．また，国慶節の式典に日本人教師たちを招待し，周総理主催の宴会や観閲式，花火大会などに参加させるなどした[34]．

1965 年 7 月，日本人教師たちは中国で初めての夏休みを迎えた．国務院外専局は日本人教師への政治思想教育の一環として国内旅行を企画した．公文書「関於一九六五年暑假期間組織日籍教師旅行参観問題的報告」（1965 年夏期休暇中における日本人教師の見学旅行の計画について），「関於按専家待遇的日籍教師暑假旅行参観計劃」（専家待遇の日本人教師の見学旅行計画に関して），「接待大連日専日籍教師情況簡報」（大連日専の日本人教師への接待の状況について）はこの旅行に関するものである．これによると，行き先は日本人教師が希望した西北地区の西安，延安，洛陽で，時期は 7 月 26 日から 8 月 14 日までの 20 日間であった．参加者は家族を含む 28 名で，出産前後の 5 家族および H 夫人のほか，すべて参加した．見学先は，西安で唐代博物館，碑林，華清池，捉蒋亭など，延安で如棗園，王家坪，軍政大学，宝塔山，南泥湾，日共主席野坂参三の旧居など，洛陽でトラクター製造工場ならびにベアリング工場，鉱山工場，龍門石窟，白馬寺，漢墓とした．また，トラクター製造工場の労働者と座談会を行ったり，サーカスを見たり，労働者と親睦会を行ったりした．交通費と宿泊費は公費で，食費は自己負担であった．学校側は孫夫亭副校長を始め，邱永豊，劉建，譚美華の 3 名教師兼通訳のほか，安全を担う董樹成保衛処副科長を派遣した．

このように，日本人教師やその家族は日常生活を送る上で様々な不安やトラブルがあったが，中国側はこれらの情況を把握した上でできる限りの工夫を凝らしていたことが分かった．

おわりに

1964 年と 1965 年の二年間，のべ 24 名（家族を含む 32 名）の日本人教師を大連日専に

は派遣した．しかし，1966 年に始まった文化大革命によって両党の関係が悪化し，派遣が中止された．結局，1966 年は 21 名の日本人教師を招聘したいと学校は省教育庁に申請したが，実現できなかった．こうして，大連日専における日本人教師の招聘はわずか 2 年で終わった．

本章では，日本人教師の来華経緯や在華活動を中国の公文書や日本人教師側の回顧録を通して，できる限りその実態を明らかにした．

来華経緯において，表向きは民間文化交流で，窓口として，日本は日中友好協会，中国は対外文化聯絡委員会であったが，実際は日本共産党が主導した対中教育援助であった．中国側はこれら日本人教師を大歓迎した．出迎えから住居，食事や医療，買い物や見学，できる限りの態勢を整えようとした．

日本語教育について，日本人教師は主に「会話」の授業を担当し，教育方法としては「聞く，話す」という直感教育を重視した．大量な公文書から反映されたように，日本人教師たちは授業がもちろん，寝食を削って教材を作り，休日にも学生への日本語指導を行った．また，卒業生の感想文に述べられたように中国人教師との連携を図った．そうした教育に対する情熱は学校側に注目され，高い評価が受けられた．

日本人教師に対して，中国側は高い待遇を与えた．高給はもちろん，夏休み中の慰安旅行，国慶節の式典や観閲式への招待参加および周総理主催の宴会の出席など精一杯の敬意を払った．

本研究を通して，中日国交断絶期における両国のもう 1 つの交流のルートがあったことが浮かび上がった．

---

1)前出，横川次郎『我走過的崎嶇小路―横川次郎回憶録』，186 頁．
2)土井大助『末期戦中派の風来記』本の泉社，2008 年，162 頁．
3)前出，土井大助『末期戦中派の風来記』，173 頁．
4)前出，土井大助『末期戦中派の風来記』，173 頁．
5)前出，土井大助『末期戦中派の風来記』，168-169 頁．
6)原康彦『文化大革命に消えた大連日語専科学校物語』岩成書房，2009 年，25 頁．
7)前出，原康彦『文化大革命に消えた大連日語専科学校物語』，91 頁．
8)「大連日専外籍教師思想動態簡報（二）」（大連日専外国人教師の思想状況についての報告(二)）．
9)「Ｙ氏半年綜合材料」，「大連日語専科学校関於日籍教師半年綜合分析材料的報告」（大連日語専科学校半年間の日本人教師の総合的分析と報告）所収．
10)「大連日語専科学校」（大連日語専科学校へ（Y 氏を対日ラジオ放送に要請する文書））．
11)「Ｙ夫人半年綜合材料」，「大連日語専科学校関於日籍教師半年綜合分析材料的報告」（大連日語専科学校半年間の日本人教師の総合的分析と報告）所収．
12)「大連日専外籍教師思想動態簡報（二）」（大連日専外国人教師の思想状況についての報告(二)）．

13)「大連日専外籍教師思想動態簡報（二)」(大連日専外国人教師の思想状況についての報告(二)).
14)「大連日語専科学校関於日籍教師近況的簡報」(大連日語専科学校日本人教師の近況に関する報告).
15)「大連日語専科学校関於日籍教師近況的簡報」(大連日語専科学校日本人教師の近況に関する報告).
16)「大連日語専科学校関於日籍教師近況的簡報」(大連日語専科学校日本人教師の近況に関する報告).
17)「Y夫人半年綜合材料」,「大連日語専科学校関於日籍教師半年綜合分析材料的報告」（大連日語専科学校半年間の日本人教師の総合的分析と報告）所収.
18)「T氏半年綜合材料」,「大連日語専科学校関於日籍教師半年綜合分析材料的報告」(大連日語専科学校半年間の日本人教師の総合的分析と報告）所収.
19)「S氏半年綜合材料」と「M氏半年綜合材料」,「大連日語専科学校関於日籍教師半年綜合分析材料的報告」(大連日語専科学校半年間の日本人教師の総合的分析と報告）所収.
20)前出，土井大助『末期戦中派の風来記』，173-174 頁.
21)前出，原康彦『文化大革命に消えた大連日語専科学校物語』，18 頁.
22)「大連日専外籍教師思想動態簡報（一)」(大連日専外国人教師の思想状況についての報告(一)).
23)「大連日語専科学校半年来専家工作総結報告」(大連日語専科学校半年間の専家の業務状況に関する報告).
24)同上.
25)「関於日籍教師対越南形勢，我社会主義経済建設，教育方針和教学改革等問題的反映」(日本人教師のベトナム情勢，我が社会主義経済建設，教育方針と教育改革問題などに対する反応).
26)前出，土井大助『末期戦中派の風来記』，176 頁.
27)前出，土井大助『末期戦中派の風来記』，175 頁.
28)「関於解決日籍教師通訊信箱問題的報告」(日本人教師の私書箱の問題解決についての報告).
29)「関於解決日本専家住房問題的請示報告」(日本人専家の住居問題の解決についての伺い).
30)前出，土井大助『末期戦中派の風来記』，176 頁.
31)「関於我校日籍教師的女児在馬路上幾次遇到中，小学生岐視経過情況的報告」(我が校の日本人教師の息女が通学途上，中小学生からのいじめを受けたことに関する状況報告).
32)「関於日籍教師 Y 氏的女児〇〇〇〇於 12 月 20 日早晨発生問題的情況反映」(日本人教師 Y 氏の息女〇〇〇〇が 12 月 20 日早朝に起こした事件に関する報告).
33)「関於日籍教師開辟参観訪問和釣魚遊覧場所的請示報告」(日本人教師の新たな参観場所や釣り場など余暇についての伺い).
34)「関於部分日籍教師参加首都国慶観礼情況簡報」(一部の日本人教師による首都国慶節

行事参加の様子に関する報告).